台湾　二水郷ってどんなところ？

10月に「友好都市」締結の調印を行い、今後様々な交流を予定している二水郷（郷は町の意味）についてご紹介します。

●位　置

台湾の中心部からやや西寄りに位置しています。

●面　積

29.44キロメートル（津別町の約24分の1）

※以降、カッコ内は津別町との比較

●人　口

16,224人（約2.9倍）

●気　候

亜熱帯型、夏は長く冬は短く年中温暖で4月～10月の平均気温は25度以上（約13.3度）、11月～3月でも15度以上（約4.4度）あります。年間降雨量は平均1,500ミリ（平均約790ミリ）で、その80%が夏に集中しています。

●歴　史

二水はもともと「二八水」と呼ばれ、開墾以来300年の歴史があり、清の時代（18世紀）には大規模な灌漑用水路が引かれ、近隣も含め２万ヘクタールに及んだ土地を潤し、全面的開発を促しました。これが「二八水」開拓の全盛期でした。「二八水」は後に「二八水庄」となり、日本支配時代に「二水庄」に改められ、戦後中華民国政府が「二水郷」を設置し現在に至っています。

二水は、台湾中央部の南投県山間部に出入りする玄関口にあたり、日本支配時代に物資集散地として栄え、現在も町にあるバロック式の赤レンガ建築が古き良き時代の面影を残しており、当時の栄華を偲ばせています。

●農産物

温和な天候で雨量も多く、灌漑用水路も整備されているため、農産物は豊かで特に米は有名となっており、その他にも茄子、ゴーヤ、へちまなどの野菜とザボン、グアバなどの果物も盛んに栽培されています。

また、農民たちが栽培した龍眼樹（ライチに似た果樹で種が龍の目に見えることからこの名がついたといわれている）の花で蜜蜂を飼育し、「龍眼樹蜜」として特産品となっています。

●文化と工芸

文化の香りが高い「螺渓石硯」（螺渓という石に彫刻を施した硯）が有名で、その他、桶の工芸、指人形劇、獅子舞などの文化工芸の伝承・保存に取り組んでいます。

●お祭り

先人たちが用水路を整備してくれたおかげで、二水が穀倉地帯になったという功績を偲ぶために毎年11月に「〇水祭（〇は足へんに包）」が催され、昨年は津別町からの訪問団も参加しました。

●環境保護への取り組み

台湾サルを保護するために国が二水郷に「台湾サル保護区生態教育館」を設置し、ボランティアを養成しながら、学校や住民に台湾サルの保護に対する理解を深めてもらう取り組みを行っています。

●レジャー施設

二水には、多くの登山歩道があり、歩きながら豊かな自然生態を観察することができ、途中、台湾サルに遭遇することもあります。

また、二水にはほとんど工業がなく、住民の60%は農業生産に従事しています。近年は政府がレジャー農業を推進しており、様々な農園や民宿などのレジャー関連施設ができました。

※これら二水郷の紹介をしているパネルをさんさん館と役場正面玄関に掲示していますので、ご覧ください。

問い合わせ先　総務課庶務グループ　☎76－2151（内線208）

都市と農村の交流
～グリーンツーリズムへの取り組み～

都市と農村の交流の推進は、「人・もの・情報」の行き来を活発にし、都市と農山漁村それぞれに住む人々がお互いの地域の魅力を分かち合い、理解を深めるために重要な取り組みです。

これまでに青少年交流等で、船橋市や南アルプス市との交流を行っていますが、町内の農家では、平成20年度から本格的に、都市の高校や専門学校等の教育旅行（修学旅行や研修旅行）を受入れしております。

本年は8月20日から25日まで、大阪ペピイ動物看護専門学校の酪農体験研修を実施。さらに9月28日からも1校の受入れが決定しています。

受入れした農家では、生活スタイルはそのままに、宿泊・食事・農業を一緒に行い、ありのままの農家（農村）生活を体験してもらいます。

自分たちの農業を知ってもらい、都市に帰って家族や知人に話をするなかで、『津別町農業の応援団』になってもらうことを目的としています。

シンボルキャラクター
グリンツくん

受入れは、農家が構成員となっている『津別町グリーン・ツーリズム運営協議会』（事務局：町、JAつべつ）が窓口となり教育旅行等を受入対象として農業体験を中心に行っています。

これまでの受入実績と今後の予定

年度	学校数	延べ人数	延べ日数
平成20年度	１校		
平成21年度	３校	262人	11日
平成22年度	※宮崎県の口蹄疫発生に伴い受入中止		
平成23年度	３校	328人	11日
平成24年度(予定)	２校(８月・９月)	200人	９日

問い合わせ先　産業振興課農政グループ　☎76－2151（内線261）